

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 朱 莉

論 文 題 目

芥川龍之介の中国表象の新側面  
——同時代の西洋側の中国観を補助線として——

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	星野 幸代
委員	名古屋大学教授	涌井 隆
委員	名古屋大学教授	丸尾 誠
委員	名古屋大学准教授	勝川 裕子
委員	(中国) 清華大学副教授	陳 朝輝

# 論文審査の結果の要旨

## 〔本論文の概要〕

本研究は芥川龍之介の『支那游記』（1925）を中心に、その中国観の従来取り上げられなかった側面を明らかにしようとするものである。

第一章では『支那游記』と、作家以外の同時代日本人の中国紀行との比較を通じて、芥川の中国観の独自性を検討した。一般に秦淮河は古典的な享樂地として描かれるが、芥川はその「俗臭」を嫌悪した。また一般には美しい中国佳人を代表する妓女について、芥川は「姝麗」（美女）ではないと評しており、芥川が依拠した昆曲『桃花扇伝奇』と『秦淮画舫録』の妓女像を参照すれば、芥川は妓女に伝統的な技芸などの芸術性を期待していたと考えられる。芥川の南京像ひいては中国像は、先行研究で指摘された伝統の愛好、現実への幻滅だけではなく、享樂的な観光に対する反感と異文化観察者としての批判精神、中国への愛好と「恨」といった矛盾を包含している。

第二章第一節では芥川の中国観が北方を旅する過程で変わっていく様子を追った。第二節では、先ず芥川が大学時代に「支那戯曲講義」を受講し中国伝統演劇を系統的に学んだことを踏まえて、『支那游記』に見られる昆曲の素養を指摘した。さらに『支那游記』内の昆曲『蝴蝶夢』の鑑賞体験を検討したうえで、昆曲『蝴蝶夢』の素材である『莊子・至楽』「嘆鬻」、『莊子・斉物論』「夢蝶」、そして芥川の創作「蝴蝶夢——A Parody」を比較精読することによって、芥川が昆曲から受けた影響を考察した。

第三章の第一節では、芥川の『支那游記』と、彼と同時期に訪中した英国知識人バートランド・ラッセルの『中国の問題』に基づいて、両者の中国観のずれを考察した。芥川が中国の下層階級を墮落したものと評し因習を超越する中国を望んだのに対し、ラッセルは下層階級の樂觀性を称賛し、伝統思想と西洋科学を結合した中国の未来を構想した。当時、魯迅は芥川の中国批判を評価し、ラッセルの中国賛美は中国への輕蔑に等しいと否定している。魯迅の基準は、芥川やラッセルの発言が、中国の民衆を如何に覚醒させるかという点にあった。第三章第二節では、科举制および中国知識人に関する見解を取り上げ、芥川とラッセルを比較した。ラッセルが中国知識人を科学与伝統的美徳の融合者、社会の改良者と称したのに対し、芥川は彼らを、西洋への抵抗者、民衆の意志を受けた社会の革命者としてとらえた。両者はともに知識人の西洋科学と伝統を融合する役割を重視しながら、下層階級と知識人とを明確に区別する芥川に対し、ラッセルの記述する下層階級と知識人には対立関係が見られない。

総じて芥川は、新旧の物事が遭遇し衝突し、変化する中国の清濁混淆をとらえた。いっぽうラッセルは、危機に陥った西洋文明が参照すべき東洋の知恵の源流として中国を表象した。魯迅は中国の病弊を指摘した芥川を誠実な批判者と評価し、西洋の憧憬を中国文明に投影するラッセルを批判した。こうした魯迅評も影響して、芥川は当時の中国を嫌悪し批判したと位置づけられてきたが、彼の中国北方における紀行、また昆曲への傾倒を追っていくと、その中国観には別の側面が見えてくるのである。

## 論文審査の結果の要旨

### 〔本論文の評価〕

『支那游記』を主とした芥川龍之介の中国観に関する先行研究には蓄積があり、比較文学的な方法による研究に限っても、ジャーナリストとしての芥川の中国現状報告としての考察、芥川が会見した中国の要人に関する伝記的考証、日本文人による中国の都市表象として読解する研究、谷崎潤一郎や佐藤春夫ら同時代「中国通」の中国紀行や創作との比較など、様々なアプローチがなされてきた。その中にあって、本研究の独自性は、以下の点にあるといえる。(1)従来、芥川と合わせて論じられることのなかった同時代の各界の日本人旅行者の紀行文と『支那游記』とを比較し、更に同時期に類似したルートで訪中したバートランド・ラッセルと芥川の中国観とを対比させ、芥川の中国観の特徴を検討した。(2)『支那游記』に見られる芥川の伝統的な中国文化への傾倒の中でも昆曲に着目し、創作における昆曲への志向を検討した。

(1)について本論は、徳富蘇峰や貴族院の政治家前田利定ら、ほぼ同時代に中国を訪れた文人の中国紀行と比較することによって、従来はネガティブと括られてきた芥川『支那游記』における同時代中国観から、より複雑な描写の機微を浮かび上がらせた。特に「南国の美人」、「南京」の章に顕著な中国の古典への言及について詳細に考証し、それらの典故が芥川の中国女性観、中国人観を形成していることを論証しようとした点は評価できる。(2)については、芥川龍之介が帝国大学の学生時代に受講した漢学者・塩谷温の講義ノートまで遡り、『支那游記』に見られる観劇の様子、一緒に鑑賞した中国劇研究者・波多野乾一の証言なども合わせて、芥川の未完の戯曲「胡蝶夢」創作に至る昆曲ないし中国伝統劇への志向を検証したという意義が認められる。

一方で、(2)のうちラッセルと芥川の中国観の比較に関する議論は充分になされたとは言い難い。ラッセルは中国文明を西洋科学に相容れないものと位置付けて称賛したものの、なぜ彼がそうした中国観に留まったのか、今日の批判的視角から当時の歴史的背景を踏まえた上で、芥川の中国観と比較考察すべきであろう。関連して、論述にみられる西洋、中国それぞれの文脈での「近代」、また知識人、下層階級等の用語については、より厳密に使用することが望ましい。もっとも、本研究が芥川とラッセルの二者を比較したこと自体、また魯迅の両者への同時代評を考察の補助とした点は妥当である。なおラッセルと比較した節の比較文学的な成果として、芥川がW・ペイター「享楽者マリウス」に依拠しつつ苦力を論じるくだりに対する分析は評価できる。

以上に挙げた発展的課題が認められるものの、本研究はこれまで多く研究がなされてきた芥川龍之介の中国観について、伝統劇に対する芥川の興味関心に着目することによって、その創作への影響に関して新たな面を明らかにし、また同時代に訪中した西洋人の中国観によって相対化し再検討したという意義がある。

以上により、審査委員一同、本論文が、博士（文学）の学位を授与する水準に達していると判断した。